大阪女学院大学・大阪女学院短期大学　教員養成センター
〈英語教育リレー随想〉 第 159 号　　2026 年 10･11 月

Introduction to Japanese culture を振り返って

仲川　浩世

2020 年 4 月に大阪女学院短期大学へ専任教員として着任して以来、あっという間に 7 年が過ぎようとしている。当時はコロナ禍でもあり、全授業がオンライン実施であった。本学は、ICT 機器が充実していたため、オンライン授業にもかかわらず、学生とのコミュニケーションを取りながら指導することが可能となった。

2020 年秋学期から現在まで、内容重視型授業の Theme Studies：Introduction to Japanese culture 「日本文化を英語で学ぶ」を担当している。履修者は、指定された日本文化に関する原書 Tuttle Publishing の *The Japanese Mind*（Davies & Ikeno, 2002）を予習し、学習管理システム（Learning Management System）上の Google Classroom を活用した反転授業に臨む。具体的には、授業前にスライドを視聴し、授業内ではグループワークやディスカッション、授業後はリーディングの要約の課題提出に取り組むといった形式である。現在、履修者の機器は、iPad からノートパソコンへと変わったが、基本的な指導法、教材、学習活動は同じである。

この授業では、日本文化と言っても社会の根底に存在する概念に触れる。例えば、曖昧、謙虚、沈黙などである。これらが日本文化の概念であるとは、この授業を担当するまでは、気にも留めなかった。しかし、履修者とともに命題についてああでもない、こうでもないとディスカッションをするうちに、このような概念について認識するようになった。

指導するにつれ、最も大きな変化は、着任当初ほぼ全員が日本で生まれ育った学生であったが、現在の履修者は 3 分の 1 が留学生である。おそらく今後も増加傾向となろう。日本で生まれ育った学生にとっては、日本文化の概念は、無意識ではあるが、当然存在しているものである。対照的に、留学生にとって、日本社会の概念を理解することは難しいと考えられる。例えば、沈黙の場合、なぜ日本人がすぐに黙ってしまうのか、時にはそれがコミュニケーションを潤滑にするための手段であることを留学生は簡単に理解し難い場合もあるとのことである。

上述したように、日本文化の概念に関するディスカッションをとおして、日本で生まれ育った学生と留学生との相互理解も増え、この授業の意義を見出してきたと思う。以前、授業終了後に協力を得た日本人学生は、英語でテーマについてもっと話したいが、思うようには表現できず、日本語なら話せるのにという悔しさを述べていたものであった。できる限り、英語を用いて意見を述べることを推奨しつつも、テーマが明確ではないため、どのように言

語化すればいいのかが明らかではない場合は、両言語を用いることも可能であると伝えてきた。この授業をとおして、日本社会の概念について考える機会を得たため、異文化コミュニケーションに関心を持ち、学びを深めたいという学生のフィードバックを受け、さらに充実した授業設計のために何ができるかを考察したい。

（なかがわ・ひろよ　教授）
